

教kyo文bun研kenだより



第27回 教文研教育シンポジウム

いま、子どもたちとどう向き合うか？

いじめや体罰等が事件として大きく報道され、学校への批判が現場の教職員の上に重くのしかかっています。一方で、「なぜ学校に行かなければいけないの?」「学校の勉強は意味があるの?」「こんな私でも、生きていていいの?」こうした悩みを抱える子どもたちが増えています。いま教育はとても難しい時代になりました。

言うまでもなく、多くの教職員は子どもたちと真摯に向き合い、寄り添い続けたいと願っています。しかし、その願いが子どもたちに届かず、苦勞することも少なくありません。

こうした時代であればこそ、私たちは、まずは教育の根本に立ち返って「教えること」の意味を問い直す必要があります。教育の思想や方法について学び、そこから新たな教育の道を探らなくてはなりません。

性急に答えを求めるのではなく、教育の本質を深めるという立場から、専門家の先生方を中心に保護者・県民市民・教職員が一体となってこの問題を考えたいと思います。





第27回 教文研教育シンポジウム

いま、子どもたちとどう向き合うか？

主催 神奈川県教育文化研究所・(一財)神奈川県教育会館

共催 (公財)横浜市教育文化研究所

後援 神奈川県教育委員会・横浜市教育委員会・
(一財)神奈川県高等学校教育会館教育研究所

2013年11月30日(土) かながわ労働プラザ3階ホールB

コーディネーター

林 洋 一 (いわき明星大学教授)

シンポジスト

森 田 伸 子 (日本女子大学名誉教授)

中 野 早 苗 (スクールカウンセラー)

加 藤 春 代 (横浜市立小学校教員)

司 会

平 山 俊 広 (神奈川県教育文化研究所副所長)



第27回 教文研教育シンポジウム

いま、子どもたちとどう向き合うか？

日時：2013年11月30日（土）

14時～16時30分

場所：かながわ労働プラザ3階ホールB

■神奈川県教育文化研究所挨拶

岩澤政和

神奈川県教育文化研究所、一般財団法人神奈川県教育会館の共催、公益財団法人横浜市教育文化研究所の共催で第27回教文研教育シンポジウムを開催します。県教文研は1981年、当時の主任手当を原資に、県民の教育文化の向上をめざして設立され、今年で34年目となります。

今回は、深刻化するいじめ等に日々接している教職員が、そういう子どもたちとどう向き合うのか、ということの問題意識としてテーマを

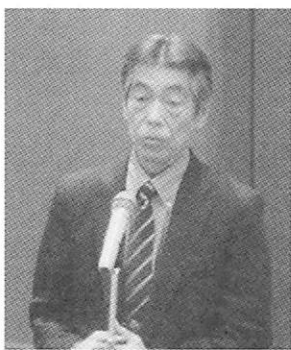


設定しました。実りあるシンポジウムとなることを期待しています。後援をいただいた神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会、神奈川県高等学校教育会館に心より感謝します。

■公益財団法人横浜市教育文化研究所挨拶

小林達夫

2013年4月に公益財団として認可されました。



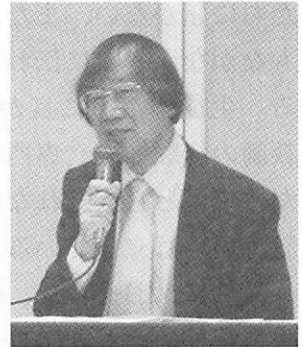
主な事業は「教育情報誌『JAN』」の発行や教育相談などの教育に関わる公益事業を広く実施しています。学校教育についてともに考えて、その研究成果を横浜市民へ還元してい

く事業の一環として、本日のシンポジウムも共催しました。是非、今後の皆様の教育活動に役立つものとしていって下さい。

■いわき明星大学教授

林 洋一（コーディネーター）

いわき明星大学人文学部心理学科の林です。本日コーディネーターとして参加しました。進行についてお話しします。最初に基調提案を森田伸子さんにお話しいただき、その後、それを受けて中野早苗さん、加藤春代さんにそれぞれの立場からお話しいただき、最後に再度森田先生からお話しいただきます。その後、会場との討論ができればと思います。よろしくお願いいたします。



■基調提言

■日本女子大学名誉教授 森田伸子

プロフィール

教育学者、日本女子大学名誉教授。旧満州生まれ。北海道出身。1966年お茶の水女子大学文教育学部卒業。71年東京大学大学院教育学研究科博士後期課程満期退学。拓殖大学助手、助教授、教授、94年日本女子大学人間社会学部教授。

●「子どもと哲学を：問いから希望へ」（2011）の著書紹介より「知ること」への欲求に満ちている、世界と出会ったばかりの幼い子どもの言葉や、「生きる意味」を探知しようとする、思春期の子どもたちの言葉。これらを丁寧に読みなおしながら、古今東西の哲学者の思索とのつながりを紐解き、哲学とその教育の可能性について考える。子どもと接する教育関係者、そして子どもを持つすべての親へ。

●主な著作

『子どもの時代 『エミール』のパラドックス』新曜社、1986年。
『テキストの子ども ディスクール・レシ・イマージュ』世織書房、1994年。

『教育と政治：戦後教育史を読みなおす』（共編著）勁草書房、2003年。

『文字の経験：読むことと書くこと思想史』勁草書房、2005年。

1 シンポジウムのテーマ＝〈教育がとて難しくなった〉という時代認識

本日のシンポジウムの案内に書かれている趣

旨を私は、私なりに次のように受け止めました。今日、子どもたちの教育がとりわけ困難になったと学校の教職員達は実感している。その背景には、多発するいじめや体罰などの教育問題があり、さらにその背景には、教員達が様々な工夫で取り組み、努力してもなかなかそれが生徒たちに届かない、また、生徒の側の思いや悩みもなかなか教員に伝わらない、ということがある。生徒のために良かれと思う教師の善意や、教師の経験知や、専門家の提供する処方箋などだけではとらえきれない、大きな困難の前に今教育現場は立っている。

そこにはおそらく、教師—生徒関係、生徒—生徒関係、そして学校—社会関係が従来より一層不透明になり、とらえにくくなっているということがあるのではないか。そこで、このシンポジウムでは、個々の問題の解決策を考えるよりもまず、今日の学校の困難はどこから来ているのか、その構造はどのようなものなのか、そしてそれに私たちはどのように向き合うのか、ということ、もう一度教育とは何かという根本にまで立ち返って共に考えてみたい。そのためのきっかけとして、教育哲学・思想史を専門としている私がまず問題提起をしてほしい。とそういうことなのではないかと理解いたしました。

このような大きな問題に対して、どこまでお話しできるか大変心もとないのですが、日々子どもたちと向き合って具体的な問題に取り組んでいらっしゃる先生たちとの対話を通して、私自身少しでも問題を深めることができることを期待して、シンポジストを引き受けさせていただきました。本日の会が、今日の教育の困難さの本質を理解し合う、あるいは共有し合う場所になってくれることを願っております。

2 大人—子ども関係に遡^{さかのぼ}って考える

今日の学校教育の困難の背景に、教師—生徒

関係の困難（教師の思いが生徒に伝わらない、生徒の思いが教師に伝わらない）ということがある、と先ほど述べました。この問題を考えるために、ここでは、教師—生徒関係のさらに背景にある大人—子ども関係にまで遡^{さかのぼ}って考えてみたいと思います。

子どもということで連想するのは、未成熟、弱い、小さい、という言葉でしょう。対して大人側は成熟、強い、大きいとなるのでしょうか。人間を生物学的な個体として見たときに、このような関係は、どのような文化・社会においても共通することだと思います。このような子どもと大人を繋ぐ最も本質的で基本的なものが保護と養育ということになるでしょう。幼い子どもたちは自分で食べ物を得ることも、身の回りの始末もできないわけですから、大人にとっての子どもに対する第一のなすべき事は、子どもを外界から守り、そして養い、一人前の大人になるまで育て上げる、養育、という言葉に対応するものと思います。

一方、人間は、こうした生物としての存在を超えた特異な性格を持っています。もちろんそれは、生物としての存在を否定して人間になるということではなく、生物としての存在でありながら同時に、他の生物種に見られない独特な特徴を持つということです。この人間の特異性について、古来多くの哲学者がいろいろな言葉で語ってきました。最も典型的なものは、古代ギリシャの哲学者アリストテレスの「人間はロゴスを持つ生物である」という表現でしょう。ギリシャ語の「ロゴス」というのは、「言葉」という意味と「理性」という意味の両方を意味する言葉です。この定義はその後も広く継承されてきました。

この定義を踏まえて、西洋哲学では、大人をロゴスにおいて完成したもの、子どもはいまだ完成に至らないもの、とみなされてきました。現在の英語で幼い子どものことをinfantと言い、フランス語では、もっと広く子ども一般を

enfantと言います。いずれも語源はラテン語で「話すことができないもの」という意味です。この言葉には、理性と言葉というものを一体のものと考え、それに関して未完成なものとして完成したものとして、子どもと大人を対比させる考え方が表わされています。

皆さんもご存じの18世紀の哲学者で『エミール』という著作で子どもの教育を論じているルソーは、こうした考え方を基本的に継承したうえで、子ども固有の理性というものを考えました。子どももちゃんと理性を持っている。ただし、それは大人の理性とは質的に異なる理性で、それを彼は感覚的理性と呼びました。子どもは自分と周りの世界との関係を、直接的に与えられる感覚的刺激をもとに、きわめて適切に判断し、自分にとって危険なものを避け、必要なものを求めることができる。ルソーはこれと区別して、大人の理性を、知的理性と呼びます。それは感覚的刺激を複合的に結合し、言葉（ロゴスですね）によって再構成して抽象的な観念とし、その観念を基に判断する理性です。

20世紀初めの心理学者ジャン・ピアジェは、ルソーのこうした理性の発達段階論を継承した人ですが、子どもの知能の特徴を自己中心性と呼んでいます。これは一般に言うエゴイズムという意味ではなくて、自分という世界の枠の中で、すべてを自分が今直接的に受けている感覚に引きつけて判断する傾向を示す言葉です。それに対して大人は自分のいる直接的な世界から外に出て、外側から自分と世界の関係を客観的に見、判断することができる。このようになることを、彼は脱中心化と言っています。ルソーとピアジェのこうした子ども観は、ある面で子どもの特徴をとらえていると言えます。後に、またこの点には戻って考えることにします。

このように、人間固有のロゴスという点においては、いまだ自分を中心とした小さな世界からしか物事を見たり判断したりできない存在である子どもに対して、大人は養育とはまた異なる

形で、働きかけてきました。それを教育と呼んできたと考えられることができると思います。この働きもまた、人類が誕生して以来、ずっと様々な形で行われてきていることだと思います。

子どもと大人の違いを以上のようにとらえると、大人—子ども関係というのは、保護する、守る、育てる、教える、といった動詞の、一方は能動態、他方は受動態という関係になります。守る—守られる、育てる—育てられる、教える—教えられるという、一方向的で非対称的な関係です。このような関係が維持されてきたからこそ、人類は滅びることなく、そして社会が存続してきたと言えるでしょう。

3 学校の成立と、大人—子ども関係から 教師—生徒関係へ

このような大人—子ども関係の長い人類の歴史の中で、ある時代以降、教師—生徒関係という特別の関係が生まれてきました。先進国ではおよそ19世紀の末に国民国家の下で成立した公教育制度がこの変化をもたらしました。それまで、教育の仕事は、家庭や地域共同体やあるいは様々な仕事場の中にある、多様な大人—子ども関係を通して営まれていました。公教育制度の成立とともに、教育は専ら、学校という人工的な建物、場所、制度の中で、「教師」という特別な存在が担うことになる。そして、子どもは、「生徒」と呼ばれる存在となりました。

この「学校」という存在の特徴としては、いろいろなことが考えられますが、そのいくつかを整理しておきます。

一つは学校の機能、役割について。学校は大



大きく言って三つの役割を担わされてきたと言えます。一つは、集団生活を通して社会的なルールや規範、行動の仕方を教えること。もう一つは、子どもに欠けている知識を教えること。この知識教育は、先ほど話した子ども観との関係で言えば、未完成な子どもをロゴスにおいて完成された状態に引き上げる、という意味合いで捉えることもできるでしょう。ロゴスは理性でありそれは即ち言葉を用いる力でした。学校教育の知識内容が、もっぱら言葉の知識となったのは、必然であったとも言えます。この二つの役割の比重については、それぞれの社会や文化によって異なるようです。私は1年間ヨーロッパに小学生と幼稚園の子どもを連れて行って生活した経験があります。地元の学校に通わせましたが、非常にドライで「教師の仕事は勉強を教えることです」といった感じでした。他方日本の学校は、給食当番、清掃、さまざまな行事など、知識教育以外の要素が大変重視されてきました。第三番目の役割は、社会的人材の選抜の役割です。これは固定化された身分制度が急速に解体した社会ほど強く、明治以降日本の学校はとりわけこの役割が強く求められてきたと思います。

もう一つは、学校という組織の特徴についてです。学校は、それまでの大人—子供関係とは全く異なる関係によって成り立っています。かつては、大人と子どもは労働も含めて様々な生活場を共有し合っており、その中で未熟、未完成な子どもに対する様々な働きかけが、さまざまな大人たちから行われていました。これに対して、学校にいる大人は、もっぱら教育することを専門の仕事とする教師になります。しかも教師は一人で多数の生徒を同時に指導することが求められます。また、子ども集団の在り方も独特なものとなりました。たまたま生活空間を共有する、年齢も境遇も異なるいろいろな子どもたちが、ゆるやかな集団をつくって、遊んだり、お互いに痛い目にあったり、学んだりして

いた状態から、人工的な「学級」という集団の中に、制度的に所属させられることになりました。この「学級」は均質性ということが前提となっています。同一年齢から構成され、学ぶ内容も、進度も全て同じでなければならないとされました。

19世紀末に成立した学校という制度は、21世紀の今日に至るまで、これらの特徴を連綿と持ち続けています。他の諸制度が時代の流れの中で激しく変化して行ったのに対して、学校は少なくともその基本的機能、構造に関しては、ほとんど変化がありません。今日の日本の学校が、「いじめ」をはじめとする教育問題に悩んでいる背景には、こうした学校の機能と構造があることを考えなければならないと思います。

4 教育問題の発生

子どもはいつの時代も、大人—子どもという非対称の関係と、子ども同士の集団関係の中で育ってきました。そうした状況の中では、今日言われている体罰やいじめに相当しそうなことは、おそらくどんな時代にもあったことでしょう。大人が力づくで子どもに教え込む。中には気の短い乱暴な大人もいて、ひどく殴ることもあったでしょう。「子どもには鞭を」という習慣さえありました。それを示すヨーロッパの昔の学校の絵があります。そこでは、教師を象徴するアイテムとして、木の枝を束ねた箠状の鞭が描かれています。また、子ども同士の集団でも、力の強い子どもが弱い子を力づくで従わせる、ちょっとしたことで仲間外れにする、集団ではやしたてる、そうしたことは日常茶飯だったでしょう。こうした中で、子どもは傷つきながら、時に反撃してみたり、ときには長いものに巻かれる術を身につけたり、ほかのことに気を紛らせてやり過ごしたり、とさまざまな対応でそれを乗り越えていったに違いありません。しかし、こうしたことが「教育問題」として、もっ

ばら学校の問題、とりわけ教師の責任の問題とされるようになったのは、学校が成立した後の歴史の中でも、比較的新しいことです。

たとえば、教育問題としての「いじめ」について考えてみます。いじめは学級という小さな集団を舞台として展開されることがほとんどである、と言われます。極論すれば、学級がいじめを生み出した、とも言えそうです。また、今日の「いじめ」の特徴は、何か具体的な理由や、あるいは目的があってやっている訳ではなく、いじめるというプロセス自体が自己目的である、ある種非常に陰湿な楽しみであり、刺激であり、一種ゲーム的な感覚のものである、と言われます。私には、いじめは、四六時中閉ざされた学級という空間の中に押し込められ、あまり面白いこともなく、長い時間を過ごさなければならない子どもたちの間から生まれた、一種の気晴らしの集団行動のように見えます。ある一人の子どもが些細な違いを見つけ出し、執拗に集団的に攻撃する、集団の風向きが変われば、あつという間に今までいじめていた側の子どもが一人がいじめの標的になる。小中学校でとくに多い、こうしたいじめの特徴は、子どもの年齢の問題とともに、小中学校段階での学級の固定性、閉鎖性と深く関係しているのではないかと思います。

5 子どもの世界といじめ

今、子どもの年齢ということを言いましたが、子どもの世界というのは、先ほど言いましたように、直接的な感覚的経験に縛られています。子どもの時間感覚にとっては、今現在がすべてであり、空間も、自分の感覚が及ぶ場所が圧倒的に重要な場所です。こういう子どもたちが学校に入ると、朝早くから午後の遅い時間まで、つまり、子どもが起きている時間の大半が学校にいるということになります。さらに、小中学校では学級が単位で活動している。何十人かの生徒の中で、朝から夕方までずっと過ごす。そ

れが月曜日から金曜日までというシステムになっているわけですから、子どもにとっての学校は、大人の私たちが考えるよりも、はるかに密度が濃く、とても切実で重要な場所だと思います。

中でも一日過ごす学級の子どもたちは互いに、同一年齢でもあり、いつも同じであることを求められています。それは、私たち大人が考える以上に、子どもたちにとっては、息苦しい関係であろうと思います。そして、この息苦しい関係の中で、子どもたちのエネルギーは何らかの形で行き場を求め、その一つのあらわれとしていじめという現象が発生するのではないかと考えます。

このことを、たまたまいじめられる方の側になった子どもの立場から見てみましょう。子どもにとって学校や学級という世界がすべてに近いものだとすれば、そこでいじめにあっている子どもにとっては、その苦痛は決定的であるに違いありません。日々が文字通り「針のむしろ」で、大人には想像もつかない苦痛であろうと思います。

大人からみれば、その学級も1年たてば変わるだろうし、長い人生からみればこの年数なんでものは、ほんのあつという間のことだから、「やり過ごしてくれればいい」と、そう願うのだけれどもそうはいかないのです。やはり、子どもの時間感覚とか空間感覚がそうはさせてくれないうのです。子どもにとって、今ここのすべての世界である学級がとてつらい。つらい場所があるので、どこかに逃げたい。

しかし、生活の中心が学校であればあるほど、逃げる場所はない。その結果、命を絶つというような、本当に痛ましいことも時として起こります。大人からみると、もうちょっと頑張って生きてくれれば、と心から思うわけですが、子どもにとっては今のこの世界がすべてですから、いじめから逃れるためには、この世界から出るという選択しかないと思ってしまう。これも、子どもの視点からみると理解できるのではないかと思います。

6 「いじめ対策」は有効か？

こういう状況があると、教育政策の側から出てくるのは、「現在の教育は知育偏重で、思いやりが育てられていない」「道徳教育が足りない」「道徳の時間はあるけれども、いい加減に使われている」「だから、ちゃんとした教科にして、道徳教育を強化すべきだ」という議論が必ず出てきます。こうした議論は、いじめに限らず、何かある度に出てくる議論です。

道徳教育を、教育問題一般の万能薬のように考えている向きは世の中に多いのですが、その割に、それでは道徳教育とは何か、何をどのように教えれば、そうした万能薬的な効果を発揮してくれるのか、ということについては、誰も自信をもって答えることができません。教育現場では様々な取組が行われ、また、教育学の世界でも様々な議論がなされています。この営みと努力は、今後も粘り強く試行錯誤しつつ、続けていかなければならないと思います。しかし、道徳教育を切り札の様に、万能薬のように押しつけて、それで教育問題が解決されると考えるのは、あまりにリアリティを欠いた、粗雑な議論であると思います。

言葉で「いじめはいけません」と言って、いじめがなくなるのだったら、先生達は全く苦労しません。「思いやり持つことは大事です」「お友達と仲良くしましょう」と言って、そうなるのであれば、そもそも問題は発生しません。そうはならないというリアルな現実というものを、踏まえて考えなければいけないと思います。あるいは、直接教師が説教するのではなく、思いやりに満ちたエピソードを読ませて、子どもたちの感動を呼び覚まし、自分を振り返らせる、という方法もしばしば推奨されています。これもまた、場合によっては子どもたちに、「またか」と思わせ、きれいごととして反撥を感じさせることに終わってしまうこともあります。

これらは、日々子どもと接している教員たち

が切実に感じているところだと思いますが、こうした実感から遊離した議論は、不毛なきれいごとか、おしつけの教育論に終わってしまいます。教師が日々感じている切実な困難と向き合うことからこそ、教育の議論はスタートさせなければならないと思います。

もう一つ、いじめ対策として言われていることに、いじめの芽を早期に摘むための、早期発見と早期の対応ということがあります。これはよく言われていることですが、私としては大変気になるところです。確かに先生が、学級の子どものたちの様子を、常に細やかに見ていることはもちろん大事です。しかし、いじめはすでに述べたように、大人には計り知れないところのある、独特な子ども集団の中で発生します。大人がそこに介入することは、決して公式的なマニュアル通りに行くものではありません。そこに教員の日々の迷いと困難があるのです。

その困難を見ずして、細かなチェックリストで教員を縛り、いじめを見逃したと言って一方的に教員を責める、というやり方は、学校という場所を一層息苦しい場所にするだけではないか、そしてこの息苦しさはそのまま、生徒集団の息苦しさをも増すばかりなのではないか、と考えます。

やはりここでも、結局は、困難を共有する教員同士の間で情報交換や試行錯誤を繰り返し、その日常的な努力を、社会全体が周りから支える体制が必要なのではないかと思います。

7 知識教育か道徳教育かではなく、新しい知識教育へ

本日のシンポジウムは、問題のむずかしさの理解を共有し合う、ということでしたが、最後に、わたしなりのささやかな提案をして終わりたいと思います。それは、即効的な対策とはおよそ対極的で、非常に迂遠な方法です。それはまた、いじめのような教育問題の発生を「予防する」という方法ではなく、今の学校を子ども

にとっても教員にとっても、もっと魅力あるものにするという迂回路を通過してのアプローチです。

私たちは、教育問題の根底に、学校という場所の息苦しさ、子どもの世界の狭さや閉鎖性というものを見てきました。それならば、子どもたちの世界を、より風通しの良い、より大きな世界へと開かれたものにするからこそ、問題の本質的な解決への道につながるのではないのでしょうか。そのための一つの方法を、私は、新しいタイプの知識教育に求めたいと考えています。

教育問題が発生するたびに、「今の教育は知識教育偏重だ。だから道徳教育を」という声が入り込んで来ると言いました。しかしそうした声を聞いたときに、いつも私は疑問に思います。今、本当に知識教育がなされているのか？足りないのは、道徳教育よりも本当の知識教育ではないのか？と。

知識偏重と言われれば、確かに、今の子どもたちは膨大な量の知識を学習させられています。「ゆとり教育」が推奨されてずいぶん教えられる知識の量が減った、不十分になった、という声もありますが、それでも小・中学校の9年間、あるいは高校も入れれば12年間の間に子どもたちが学ぶ知識の量は大変なものです。大人になってどれだけの人々がそれらの知識を忘れずにいるのでしょうか。大人になってまったく使うことがないと分かっている、歴史の年代や理科の公式をそれでも子どもたちが必死になって覚えるのは、それが試験に出、その結果が進学したり就職したりする上で決定的に重要であることを知っているからです。

この知識の特徴は、大学入試試験に多く用いられているマークシート式解答用紙に象徴的に示されているように、○か×かがはっきりしていて、その中間はないという知識です。また、一つ一つが切り離されて単独にとらえられた知識です。入試をする側から見れば、選抜するのにこれほど確実で公平な方法はありません。

最後に控えているのが、このような選抜シス

テムだとすれば、学校の知識教育はこうした選抜システムにあった教育になるのは必然と言えます。今日、「知育偏重」と言われているときの「知育」とはこうした知識教育を指していると考えられます。

それに対して、これではいい人材が選抜できない、という声が入り込んで来、大学入試をもっと「人物本位」という意見が出てきました。ちょうど、知育偏重だから道徳教育の強化を、という意見と同じです。詰込み型の知識教育か、道徳教育か、という硬直した二項対立がここにもあります。私が提案したいのは、こうした二項図式を破る新しい知識教育です。

8 存在の驚異へ—子どもの世界を広げる新しい知の教育

先ほどふれましたアリストテレスは、自然や人間や社会についてのありとあらゆる領域の知識を体系化した多くの作品を残した人です。もちろんそれは、現代の精巧を極めた科学から見ると素朴に思われる知識でもあります。しかし彼の哲学は、「我々が住んでいるこの世界はどうなっているのか、そもそもこの世界が存在しているということはどういうことなのか」といった最も本質的で根底的な問いから始めて、この問いを、ロゴス（理性・言葉）の限りを尽くして考え続けています。彼がそこから出した答えは時代とともに古くなっても、彼が考え抜いたその思考のプロセスは、今も、同じような「問い」を問おうとする哲学者たちにとって、貴重なものです。そのアリストテレスは、哲学の始まりは、何かの役に立つとかいうことからは離れた、世界に対する純粋な驚異の念、不思議だ！と思う気持ちにあると述べています。

この驚異の思いに突き動かされて、人間は考え始める。そしてそこから自然や人間や社会についての様々な知識が生み出されてきた。今日子どもたちが学校で学んでいる様々な知識は、

すべてこうした人間の営みの結果に他なりません。しかし、いかに新しい知識が積み重ねられようと、根底にある不思議はどこまでも不思議のままです。たとえば、この世界はどうやって始まったのか、という究極的な問いがあります。この問いをめぐる、古代以来、現代の原子物理学にいたるまで、多くの科学者たちが多くの仮説を立て、それを様々な形で実証し、論争を繰り返して、そしてその過程で、物質とは何か、時間とは何か、空間とは何か、光とは何か、などなどについての様々な新しい知識をもたらしてきました。

けれど、この壮大な科学の営みをもってしても、「本当に何にもない、ってどういう意味？」という子どもの問いに答えることはできません。この問いは、私が『子どもと哲学を』という著書の中で引用した、ある8歳の女の子の詩に出てくるものです。例えば、ある学者たちは世界＝宇宙の始まりを、ビッグバンによって説明します。すべては、時間も空間も、ビッグバンによって始まった、その前には何もなかったと説明しています。でも、「始まった」、という以上はその「前」が何らかの形である、ということではないか、「本当に何にもない」ということ、絶対的な無とはいったい何でしょう。そもそもそうした絶対的な無というものを、私たちはどうやって知ることができるのでしょうか。これは究極の哲学的問いに他なりません。

人間とは何か、という問いにしても同じことが言えるでしょう。人間は理性＝言葉を持つ生き物である、という定義についてお話ししました。しかしそもそも理性とは、言葉とはなんなのでしょうか。それはどのようにして始まったのでしょうか。社会についてもそうです。人間は社会的な存在であり、社会なしに存在しえない、と言われます。それではいつどのようにして社会が始まったのか、その前にいたのは人間ではなかったとしたら、それは何なのか。

このように、自然についても人間についても

社会についても、それについての様々な知識の始めには、究極の問いがあるのです。この究極の問いは、知識を持っている人も持っていない人も、素直に驚異する感性があれば、誰もが共通に普通に抱く、ごく当たり前の問いです。この問いの前には、大人も子どももなく、共に生きてこの世界にあるという、大きな驚異、奇跡のような出来事を、一緒に受け入れ、一緒にその意味を問い、一緒に考えることができるだけです。

出来上がった答えを与えるのではなく、問いを共有し合い、共に考える教育は、今、哲学教育として、小学校や中学校、高校で少しずつ始まっています。そこでは、子どもにとって関心のあることならどんなことでもテーマになります。対話のルールを守りながら、互いにロゴス（理性・言葉）をつくしてどこまでも考えぬいてみる。そこにまた、いっそう深い問いが開かれてくるなら、その哲学のレッスンは成功したと言えるでしょう。このような時間を、ほんの少しでも学校の中に持ち込んでみたら、というのが私のささやかな提案の一つです。

最後に強調したいのは、このような哲学教育は、決して知識教育と別々のものではない、ということです。すでに話しましたように、人間が長い歴史の中で積み重ねてきた知識はすべて、あの究極の問いから始まり、そして再びあの究極の問いへと帰っていくものです。

ですから、知識とは、人類の長い問いの歴史の中で、「今ここまでわかった」、「今のところ科学者たちはこんな風に考えている」といういわば、問いの過程の中間報告のようなものと考えられます。問いはどこまでも続いていくのであり、自分もまたこの問いの歴史の中の一人なのだ。そう子どもたちに実感させる知識教育を、様々な分野の科学者たちが協力して作り出していくこと。それが今の教育で最も求められていることではないでしょうか。

例えば、これは大学生を対象にした授業実践ですが、生物としての自分自身を学生に深く考

えさせるために、単細胞生物の発生から始めて、生命全体の不思議な壮大なプログラムについて、数時間にわたって講義した記録を読ませていただいたことがあります。内容を工夫すれば、小学校や中学校でも十分に可能なのではないかと思います。知識を学ぶことが、後で試験に役立つためでも、社会に出てから役立つためでもなく、学ぶことそれ自体が、世界の不思議へと分け入る胸躍る経験となるような、そうしたものであるならば、学校は、広い宇宙と人類の過去未来へと開かれた場所となることができる。

子どもたちが、自分という小さな存在がこの大きな世界とつながっていることを、こうした知識教育を通して生き生きと実感することができるような、そしてこうした経験を通して、自分の小さな命の意味を考えることができるようになるような、そうした知識教育。これは、実は学校という制度の中でしかなかなかできないことです。学校には長い時間があるのです。それを、本当に有効なことに使うことを、真剣に考えなければならないと思います。

■林：簡単にポイントだけをまとめると次のようになるかと思います。

- ①大人と子どもとの違いについて、哲学的教育的な視点からのお話。
- ②近代社会の中で出てきた公教育という、閉ざされた狭い装置の中で生じた子ども問題の特質。
- ③本当の知識教育を実践することが重要。

次は、学校の教員とは少し違った立場から、スクールカウンセラーの立場からのお話を伺います。

問題提起1

■スクールカウンセラー 中野早苗

子ども（集団）の変容

県内の小中学校でスクールカウンセラーをし

ています。スクールカウンセラーを始めてからの18年間を振り返って考えてみますと、子どもは何時の時代も変わらないと言う議論があったり、やっぱり時代とともに変わってきたという議論があったりしますが、私の実感としては、やはり子どもは変わってきたな、と思います。

一つは、子ども集団そのものが変質してきた。スクールカウンセラー同士で話をすると、発達障害の傾向を持った、コミュニケーション下手な、人の気持ちを想像できない、急にびっくりするようなことをしてしまう子どもの割合が、増えてきたという実感を持っています。

これはデータや統計をもとにしたものではないので主観的ですが、発達障害という概念自体が2、30年前はなかったもので、比較することはできませんが、現場にいる者として実感として増えてきているということです。

そして、社会的に未熟な子どもたちが増えているのですから、発達障害傾向のない社会性が順調に育っている子の居場所がなくなる、あるいは居づらくなってしまいうということも、最近では起きてきていると思います。

子どもはスポーツでも遊びでも主体になれず お客さん状態

子どもを取り巻く環境が大きく変容していると思います。その一つは、安全な遊び場所がないということです。自分自身が小学生の頃は、本当によく外で遊んだという思い出があります。遊んでいた場所が、もう干上がってしまった用水路の橋の下であったり、空き地—子どもの私たちにとっては、いつ遊んでもいいという空き地—が何か所もあった。当時は地主さんが寛大で、「入るな」とか余りうるさいことを言わないで、子どもたちが遊ぶのを黙認してくれていたと思います。そこでドッジボールをしたり、ソフトボールをしたり、本当にその時集まったメンバーで遊ぶという、柔軟な友だち関係でダ



イナミックな遊びができていた。今はそういうことができなくなっています。環境が大きく変化し、危険で、車も多く、犯罪の被害に遭うことも増えていて、とても子どもだけで外

で遊ばせておけない状況もあります。

そのために、幼児期には「公園デビュー」ということがあって、公園で遊ぶのも、自由に遊ぶのではなくて、必ずその傍らに母親がいます。母親も公園に集まる母親の友人関係をうまくやっていたかというところに、不安を感じています。大人同士の思惑が入り交じっている中で、子どもたちは遊ぶという体験をスタートさせているわけです。

少し大きくなるとミニバスケットとか、野球とかサッカーだとか少年スポーツというのが盛んにあります。やはり、自由に遊べない。なにかスポーツをさせようとする、少年スポーツチームに所属させるしかありません。一度所属するとチームとして成り立っている、続けなくては行けない。母親も「始めたものは続けなさい」という訳です。

先ほども森田先生は学校そのものが閉じられた集団だと言われましたが、学校へ入る前の公園で遊ぶことも、少年スポーツも、人工的で意図的で、大人が主導権を握っている場になってしまっているということです。

もう一つ大きな影響を与えているのがITの発展と普及だと思います。特に中学校ではLINEというスマートフォンを使ってのツールを介してのトラブルが非常に多いのが現状です。IT（インフォメーションテクノロジー）の歴史を振り返って、それが子どもたちにどういう転機を与えたのか整理したいと思い年表を作成しました。ご覧下さい。

大人がプログラミングしたゲームで子どもは遊ばされるようになった

1980年に任天堂がゲーム&ウオッチを発売しました。余り長いこと流行らなかったのですが、時計の機能が付いたゲームが1種類だけできるゲーム機でした。

1983年にファミリーコンピュータが発売されます。これはソフトウェアを買うことによって、一つの機械でいろんなゲームが楽しめるものでした。これが瞬く間に、子どもたちの間に広がっていきました。私がファミコンの影響を実感したのは1990年代の前半、私自身の子どもが幼稚園、小学校低学年位の時でした。子どもが友だちと「〇〇ちゃん、遊べる？」という約束を交わしているのを聞いて、「もう、遊ぼう！」ではないんだな、「遊べる？」って相手の都合を訊いているんだなって、そこにちょっとした変化を感じました。

そうすると、言われた子が「今日は△△ちゃんと遊ぶ約束しているから遊べない」という返事が返ってきて、このゲーム機の影響の大きさを感じました。

発売当初、コントローラーは2つ付いていて、2人で対戦する遊び方でした。2人以上が集まった場合は、順番で遊ぶわけです。やはりあまり大人数では、順番が回ってこない、偶数の方が対戦しやすい、奇数では駄目とか、子どもたちの中にはそういう思惑があったと思います。そのうち、コントローラーが4つに増やせるとかになりましたが、ここで起きた大きな問題は大人がプログラミングしたゲームで子どもは遊ばされるようになったことだと思います。

缶蹴りや鬼ごっこなどのそれまでの遊びは、子どもが主体であり、人数は何人でも集まった人数によって遊び方を工夫して変えていくことができる、柔軟でクリエイティブなものでした。ゲーム機の出現によって、大人が作ったプログラム通りに遊ばされる存在になってしまった。

年	出来事	備考	影響
1980	任天堂・ゲーム&ウォッチ発売		
1983	任天堂・ファミリーコンピュータ発売		子どもが遊びの客体となる
1987	NTT・携帯電話発売		
1987	パソコン通信サービス・ニフティサーブの運営開始		
1989	任天堂・ゲームボーイ発売		子どもがゲーム機に従属する
1990	任天堂・スーパーファミコン発売		
	ポケベルが女子高生に普及し始める		友人間の連絡手段の変化
1994	SONY・プレイステーション発売		
1996	任天堂・ニンテンドー64発売		
	携帯電話会社新規参入により、料金低下	携帯電話ユーザーが増加し始める	
1998	アップルコンピュータ・iMac発売	家庭のインターネット接続が手軽になる	オンラインの人間関係の始まり
2000	SONY・プレイステーション2発売		
2001	3G携帯電話発売	以後、中高生に普及	メールが友人間の主たる連絡手段になってゆく
	任天堂・ゲームボーイアドバンス発売	通信機能	
2004	任天堂・ニンテンドーDS発売	無線LAN、ワイヤレス通信、赤外線通信	
2005	SONY・プレイステーションポータブル発売	無線LAN、赤外線通信	
2006	SONY・プレイステーション3発売	インターネット接続	
	任天堂・Wii発売		
	ブログ利用者2500万人		
2007	スマートフォン発売		
	女子高生の半数以上がプロフを持つ。		プライバシー放出
2008	任天堂・ニンテンドーDSi発売		小学生のネットデビュー促進
	アップルコンピュータ・iPhone3G発売		
2009	日本国内からのtwitterアクセス人数320万人		
2010	mixi有効登録者2000万人		
2011	facebook利用者1000万人		
	6月、LINEサービスを開始		自他の境界の崩壊
2012	12月20日より、18歳未満のLINEにおけるID検索の利用を制限(auのAndroid端末対象)		
2013	1月18日、LINE登録者が19か国で1億人突破		
	4月3日、テレビ東京系でアニメ「LINE TOWN」放映開始		LINEへの関心の低年齢化
	9月30日より、NTTドコモ・ソフトバンクモバイルのAndroid端末でも、18歳未満のLINEにおけるID検索の利用を制限		

約束をする相手も、一緒に遊ぶ人数も、ゲーム機に規定されて決まっていくという風に変ってきました。

1989年には携帯型のゲームボーイが発売されました。この時はまだ、友だちにゲームを貸して遊ばせてあげるということはあっと思います。

次に2001年にゲームボーイアドバンスが発売されます。通信機能が付いたゲーム機です。

同じ公園にゲームボーイアドバンスを持っている子が数人いたら、一緒にゲームができるようになりました。ゲーム機を貸し借りすることはしづらくなって、ゲーム機がその子固有の持ち物ということになって、持っている者同士だけが遊べるという遊びの空間ができてしまった。

結局子どもはゲーム機の持ち主ではあるけれど、子どもがゲームに従属した存在になってし

まったと思います。その後、ゲーム機がインターネットにつながるようになり、ゲームでの遊びとインターネットの世界との境目がなくなってきます。

..... 無機質で危険なコミュニケーション

次に、友だちとの連絡手段の変遷です。

1987年にNTTが初めて携帯電話を発売します。この携帯電話は大きくて業務用以外には使う人はいませんでしたが、固定電話でしか連絡が取れない状態だったのが、自分のいる場所で連絡が取れるという画期的な変化がここで起きました。

1990年には、ポケベルが女子高校生の間にもものすごく普及します。これは、数字しか打てないのですが、女子高生の間で数字をまるで暗号のように使って、いろいろなメッセージを送ることが流行しました。私はある意味、女子高生のクリエイティビティ、創意工夫に感心したものでした。

1996年には携帯電話会社がいろいろ出てきて、料金が低下して、携帯電話が普及していきました。2001年に3Gの携帯電話が発売されて、この頃から中高校生に携帯電話が普及していきました。そのことによって手書きの文字ではなく、メールという画面上の無機質な文字のやりとりというものが、友人間の主たる通信手段ということになってきました。2007年にはスマートフォンが発売されました。その当時、プロフが流行りました。自分のプロフィールを作ると、ブログのように日記を書いたりできるというものです。インターネット上に公開するのですから、誰にでも見られてしまうものです。アップしている本人はそこまでの意識がなかったので、克明に個人情報を書いてしまって、知らない人が家に来たり、友だちの写真や個人情報が漏れたり、名指しで悪口を書いたりというトラブルが起きました。プライバシーの流失ではなくて放

出です。自らやって、それがどういうことを意味するか、無自覚でやってしまったわけです。2008年にはiPhone3Gが発売されて、今では中学生でもかなりの数がスマートフォンを持っているという状態です。

インターネット全般では1987年にニフティサーブが運営開始し、パソコン通信が始まります。当時は文字しか出てこないようなものでした。クラシックが好きな人がクラシックフォーラムに登録して、ハンドルネームを持って意見交換するという、会えない人と議論するなんて今までなかったのが、結構楽しむことができました。こういうものから、インターネットが始まります。1998年はiMACというスタイリッシュなパソコンが発売され、オールインワンでインターネットにつながるという画期的なものでした。この頃から、家庭でインターネットにつながると言うことが手軽になり、どんどん普及して行きました。

2008年以降、プレイステーションもDSiもインターネットにつながり、もうこれを持っている子どもの方が、大人より知識があって、無線LANを使って友だちとやりとりしたり、インターネットにアクセスしたりして、買ってやった大人のほうが全然知らなかったということも結構ありました。このようにして、パソコンからも、ゲーム機からも、携帯・スマートフォンからもインターネットにつながるのが当たり前というふうになってきました。2009年以降はTwitterとかmixiとかといったソーシャルネットワークサービスに登録する人が激増して中学生も多分多くいると思います。

..... 子どもたちは片時もスマートフォンを離せない

そして、2011年からLINEがサービスを開始しました。このLINEが今子どもたちの間でトラブルの原因になっています。LINEはメールよりももっと便利に、手軽に知っている人とメッ

セージをやりとりできるものなんです。

一つの画面に自分のメッセージと相手のメッセージが載りまして、それがずっと残っていくので、3日前にどんなやりとりをしたかも、遡って見ることができるし、グループを作ることもできます。2人でも3人でも、30人でも40人でもできるんです。私は自分の娘達と連絡を取るとき、3、4人のグループを作ると、確実に娘達に同じメッセージが届くし、相手がそれを読んだかどうか表示されるので、とても便利です。

しかし、このLINEに子どもたちが巻き込まれて、非常に難しい、悩ましい問題になっているのです。例えば、6人の仲良しグループを作ったとします。リーダー格の一人が、気に入らないメンバーがいると、その子はずして、裏グループを作ることが簡単にできるんです。表向きの6人グループがあり、裏には一人外した5人のグループがある。そこで悪口が言われているわけです。だから、子どもたちはちゃんとグループに誘ってもらえるか、知らないうちに外されていないか、とても敏感になっています。

また、LINEにはタイムラインというのがあって、相手を決めてメッセージを送るのではなく、つぶやきのように不特定多数の人に自分の状況をアップする所があって、登録している人たちが全部見られるようになっていきます。そうすると、友だちが何か発言していたら、何か反応しておかないと無視したと言われるので、四六時中タイムラインにアクセスして、誰か何か発言していないかチェックすることになります。子どもたちは片時もスマートフォンを離せなくなります。

最近マスコミでも話題になりましたが、非常識な写真をLINEにアップして、それが広まってしまって、解雇されたアルバイト従業員とかもいました。一旦、写真をアップしてしまうと、どこまで広がって行くか分からない、とても危うい場所なのです。

..... 友だちと24時間、365日、ずっとつながりっ放し

ITの発展と普及によって子どもは遊びの主体でなく、結局、機器の持ち主でありながら付属物になってしまっている。無機質な文字情報だけのメールによってリアルなコミュニケーションを阻害されてしまっている。ソーシャルネットワークサービスを使うことによって、自分宛てではない文章までチェックしなければいけない。森田先生が言われた人工的な閉じられた集団の友だちと24時間、365日、ずっとつながりっ放しになってしまっている。

少し前であれば、ちょっと気になることがあっても、学校を離れて家に帰ってきて、一人になれば、一旦そのつながりを絶って、自分を振り返ってみることができる、そういう思索の時間が持てました。それができなくなってしまっている。

..... 遊びもスポーツも型にはめられて、閉鎖的でクリエイティビティを失い、スマホでさらに首を絞めている子どもたちとどう向き合うのか

「子どもがスマホ依存になってしまって、テスト前でも、風呂に入るときも、片時も離さない。どうしたらよいのか？」という相談に対しては次のようにアドバイスしたことがあります。「今、子どもたちが置かれている状況は親世代が経験した世界とは全く違う世界なので、親世代が想像もできないような種類のストレスに晒されています。決して、命令とか叱るだけで、何とかしようと思わないで下さい。友だちが何を自分について言っているか、不安でチェックせずにはいられない気持ちについては、本当に良く聴いてあげて、理解できなくても『あなたは、そんなに不安なんだね』というところに共感してあげて下さい。その上でどうすればいいのかについては、決して拙速に答えを出さなくて、とにかく子どもと一緒に悩んであげること、一緒に考えてあげるという立場をとってあげて

下さい」と言います。

一つ例を挙げます。

小学6年生の女の子がクラス替えがあって、3人と仲良くなりかけて、休日に遊ぶ約束をしました。そして、その子以外の3人は携帯電話を持っていました。その子が待ち合わせ場所に行って、いくら待っても他の子が来ない。諦めて帰ってしまいます。後で分かったことですが、残りの3人は、ちゃんと会って遊んでいた。多分誰かが遅れるということで、メールで連絡取り合っただけで場所を変更して会うことができたけれど、携帯のない彼女だけは連絡が来なかった。その子には何の落ち度もないのに、他の3人してみれば、「あの子、勝手に帰っちゃった」って、その子が悪いかのようになってしまった。折角仲良くなりかけていたのに、駄目になってしまって、学校を休みがちになってしまったという事例があります。

こうなってくると、親がしっかり考えて制限すると、その子どもは子ども同士の中ではリスクに晒されることになってしまって、子どもにとって重たすぎるものになってしまうと思います。だから、個々の家庭での管理では、子どもたち全員を救えないと感じました。子どもたちが健全に育っていける環境を取り戻すということを考えていかなければいけないと、思っています。

リアルなスキルの習得が先決

私自身がニフティサーブのパソコン通信をやっていた頃は、まだユーザーが少なかったもので、そんなに痛い目に遭わなくて済みました。しかし、今の子どもは、ものすごくユーザーが多くて、悪意を持って狙っている人もインターネットの中に無防備に晒されているわけです。

子どもの発達段階から考えて、会うことのできない人との文字でのコミュニケーションというのは発達段階を逸脱していると思います。や

はり、子どもは自分の行動範囲の人とのコミュニケーション～表情だったり、声の調子だったりなどのたくさんの情報が得られる～をしっかりと身につけて、その中でトレーニングされて大人になっていく。大人になってから、会えない人との、文字を介してのコミュニケーションがようやくできる、そういうことに責任が持てるようになるのだと思います。

パソコンとかスマホは便利ですが、電源を入れなければただの箱に他なりません。地震などで電源が入らなくなる状況はいくらでも考えられます。ですから、子どもである間は、パソコンの使い方やパワーポイントの使い方を小さい頃から教えることより、パソコンもスマホもインターネットもない中でどう暮らしていくかというスキルを身につけておく事の方が、大事ではないかと思っています。

●林：私もファミコンからプレステ3くらいまでは何とかくっついていけますが、それ以後は駄目という感じです。次に小学校現場で日々子どもたちと向き合っていると言う視点から話をお願いします。

問題提起2

■横浜市立小学校教員 加藤春代

小学校の教員を30年以上やっております。また、児童支援専任も2年くらい担当していましたので、その経験から学校現場がどう難しいのかということについてお話しします。

「団地ともお」君はいない。

まず、私自身はどういう子を理想としているのかについてお話しします。NHKで土曜日の朝9時30分「団地ともお」という漫画の番組があります。その番組がとても良くて、業務に追われながらも毎週見えています。見ているとつい笑いがこぼれます。少年「ともお君」はみんな

横浜市立小学校 加藤 春代レジュメ<学校現場の立場から>

1 子どもたちの現状 (小学校)

◆経済的に2極化が進んでいる。

① 経済的に安定した家庭の児童

塾やスポーツクラブなどで忙しい。長い時間学習する。よく遊び、いろいろなところに連れていってもらえる。保護者とよく出かける。いろいろな体験ができる。

エピソード：生活には不自由がないが、ある日から不登校になった。保健室登校から始めて、午前中だけ、今は1日中学校にいられるようになった。原因は不明。学習面の不安か姉妹で比較され、自信がなくなったのか。自分の気持ちを出さないようにしている。

② 保護者の生活に翻弄される児童

・単身家庭（保護者の離婚でゆれる心）・まずは学校は休まず来る。・学校で使うものが用意できない場合もある。・家庭に帰った時に保護者がいない。（祖母が援助してくれる）・朝食、夕食の状況が心配

エピソード：単身家庭。保護者病気。夕方18:00、暗い中買い物に行くという姉。下の子が小学2年生。保護者の思いで学校にきていない。保護者が他機関との連携を自分から拒否。姉妹はやさしい心をもつ。けなげである。栄養不足、体が小さい。服装も汚れているときがある。

2 保護者は変わってきたのか

◆授業参観、土曜参観、運動会、フェスタ、懇親会、個人面談には多くの保護者は出席する。しかし、懇談会には出席しない保護者が多くなった。

◆自分の子の教育は投資と考えて、お金をかけて自分で育てようとしている。

◆子どもの時間を目いっぱい塾やおけいこに行かせている。学校行事でも休ませることを考えない。

◆学校であったことを聞いて、よく確かめないで学校にクレームの電話をかけてくる保護者。

◆離婚などの問題をかかえている保護者も多くなった。

3 学校はどうすればいいのか。

◆教育の機会均等：だれもがどんな環境においても自分に自信を持って（自己有用感）生活できるように心がける。

◆愛情豊かに声掛けをしていく。キレている原因をさぐり、トーンダウンさせる技術を学び、子どもの気持ちに寄り添って考える。

◆自信を持って学習にむかえるように、壁を乗り越えさせ、成功体験を積み重ねる。

◆学級、学年、全校さまざま子どもたち同士が心を通わせる仕組み（ペアの取り組みなど）のしくみを作っていく。

◆総合学習やキャリア教育の中で、がんばっている大人の姿との出会い組み込んで、子どもたちが未来へ希望がもてるような取り組みをしていく。

4 地域・諸機関との連携はどうあったらよいか。

◆学校はいろいろな場面で地域と連携していくことが必要。

様々な事情で学習へ向かえない児童も多い中で、自治会、シルバー、学習ボランティア、畑ボランティア、おやじ・おふくろの会・・・などの地域の方々の協力のもと、子どもたちがいろいろな方々と出会い、叱られたり、ほめられたりしながら、豊かに成長していく。

◆学校カウンセラー、区役所。警察など他機関との連携の必要性

◆担任だけでなく小中連携、児童支援専任との協力など、チームで対応することが大切

なとよく遊びます。グラウンドでいつも3人以上で野球をしています。元気ですがあまり勉強はできません。しかし、「スポーツ大佐」という漫画が大好きでその人のまねをしたり、人情に厚く、何か困ったことがあったら、必ずそこへはせ参じるという伸び伸びと育った子どもらしい子です。

ある場面で、お年寄りが出てきます。自治会長さんで、苦みばしった顔です。そのお年寄りを大事にする心豊かな子です。そのお年寄りが

「団地で花見をしたい。その花の下でみんなで食事をしたい」と言うと、誰も目を向けない中、ともお君は「やってみよう」と言って実現させる、そんな昔の子のような子です。

お父さんは単身赴任、母と姉の3人で暮らしている。留守番なんかしても、大失敗を繰り返して、本当に笑いなしでは見られません。

しかし、こんな子が私の学校にいるかといえ、なかなかいません。皆さんの回りにはいらっしゃいますか。

保護者の生活に翻弄されている子どもたち

家庭的に恵まれていない子の中には、修学旅行が唯一の旅行という子もいます。保護者の協力が得られず、色々なことが中途半端で、根気強く取り組まない子もいます。生活には不自由がないのですけれど、ある日突然不登校になってしまった。何が原因だろうといろいろ考えていたところ、状況は良くなったり、また悪くなったり…。

保健室登校の子も何人かいます。

また、単身家庭でお母さんが病気で、夜の9時頃に中学生と小学低学年の子が、本当にわずかなものを買物に行く姿に出会ったこともあります。心根はとても優しく、健気なところもあるのですが、栄養不足で体が小さくて、服装も寒々しいという状況の子どもです。

保護者の中には子どものために、単身で2～3カ所で働いて生活を支えている家庭もあり、そういう中で子どもが、一人で留守番、一人で食事など、とても切ない状態になっていると感じることもあります。

一方で、少年スポーツクラブで忙しい子で、みんなで一生懸命練習しているのですが、集中できないのかうまくいかず、みんなで並んで監督の話を聞いている場面に遭遇したことがあります。監督から「おまえなんかいらない！」って言われているシーンを目の当たりにしました。

誰もが好きなことをできる時代になったのですが、少年スポーツクラブ、〇〇クラブではその中に競争があり、必ずしも楽しくない状況や心を痛める状況にある子もいます。保護者は「頑張れ」「頑張れ」で、悩んでいる子の気持ちに寄り添えない状況もあります。

「僕、5時間も勉強したんだよ」という子もいます。保護者の期待に一生懸命に応えようと、遊びもしないで勉強ばかりしています。「遊ぶ」という大切な場면을削って、学習塾で出会う友だちが友だちだと考えていかなければならない

子があります。

保護者も変わってきた

最近では授業参観や運動会など子どもを見る機会には保護者はよく集まりますが、懇談会など先生とコミュニケーションをとらなくてはならない場面になると帰ってしまうと言うことをよく見かけます。他の学校も同じような傾向があるようで、保護者もコミュニケーションが苦手ではないかと感じます。

また、最近では連絡網がないので、何か事件が起きて、保護者同士連絡を取り合うような場合、教師が中継を取り、「この電話番号を教えてくださいですか？」などと何回もこんなやりとりをしなければ話し合いができない状態になっています。

一方、生活に余裕のある保護者は自分の子の才能は自分で育てるという感じで、自立して子育てをやっていると感心することもあります。そういう家庭でもこんなことがありました。小学2年の校外学習で子どもが疲れ切っているのに、「これからスイミングなんだ」とか「僕は塾」というような場面に出くわすことも多くあり、疑問に思うこともあります。子どもは疲れているのでゆったりさせたいと思います。

また、学校によく来て下さっているいろいろとご意見を伺うことはいいのですが、一方的な訴えだけを先生に言ってくる場合が増えていると感じます。保護者は家庭でたっぷりの愛情で受けとめ、よく子どもの言うことを聞き、判断し、学校や友だちから学校で起こっている事実を知り、問題を把握する必要があります。子ども同士で起こったトラブルは、よく事実を確かめて、情報収集し、正しい解決に向かう努力をしなければなりません。

子ども同士のトラブルが保護者同士のトラブルに発展しそうになったこともあります。

初任の先生に対して、一生懸命やっけても



協力をして下さらないこともあります。「授業が下手だ」「子どもが荒れるのは先生のせいだ」「うちの子が成長できない」などと先生の責任へ転嫁してくる保護者もします。

私たちが初任の頃は、よく分からず手探り状態ながらも、よく子どもたちと遊びました。保護者からご意見をいただきながらも、「先生、頑張ってよ」と協力の言葉とねぎらいがありました。子どもために、学校も家庭も協力し合う関係がありました。

今は他に対して厳しい方が増えていると感じます。自分たちの利益だけを追求しているからでしょうか。思いやりや優しさを子どもたちに求めるならば、大人がその範を示していきたいものです。

先生はどう対応していけばいいのか？

学校は、愛情深くあらねばならない。安心、安定も重要だと考えます。私はこのスリーA(愛情・安心・安定)というキーワードで考えています。子どもと出会うときに心に留めておきたいところです。このスリーAの上に、やさしさと・生き抜く力、心と体が強くたくましい子が育っていくのです。

東日本大震災の時、「生きていさえすればいい」と誰もが思いました。家族が一緒にいようと全員が思ったはずですが。少し時間がたちますと忘れてしまうのは悲しいことだと思います。自然災害はもうすぐそこにやってきていることも、私達は知っています。子どもたちにどういう力をつけて、どんな子に育てていくか、そのために何をしなければいけないか、保護者と話し合えたらいいなと思います。保護者との懇談を大切にしていける必要があります。

根幹は教育の機会均等だと思います。どんな生活環境にあっても、自分に自信を持って—自己有用感を持って—生活できるような生き方ができるといいなと思います。先生方も、一人が困っていると、職員間で共通理解して、休み時間や空き時間に一緒に組んで、助けていく体制をしています。問題行動が起きたとき、教師間で対応策を考えるのですが、児童支援専任をやっているからは「いや、怒っても、無理ね」と考え、その子の背景を見据え、その子の良さを見つけるようにすることが多くなりました。

また、問題行動を起こした子が「トーンダウンする技術」や「寄り添う」「傾聴」ということをもっと学ばなくてはいけないと考えています。最近子どもたちの失敗を恐れているところがみられますが、いろいろな成功体験も必要ですが、もっと失敗の経験もさせないと、将来子どもたちが努力していいものを手に入れることができないんじゃないかと思っています。

学校外の空気を入れることが重要

森田先生のご意見を伺って、学校という閉鎖された環境に外の空気を入れることが必要だと考えています。

本校では、保護者との連携とともに地域のシルバーの方に声をかけて、学習ボランティアを始めました。ノーペイでボランティアに来ていただいています。畑ボランティアも来ていただいています。その方達が、子どもたちをほめてくれる。それが、やっぱりいいなと思います。先生だといつ叱りたくなってしまおうのですが、それをふっと受け止めてくれたときに、「ああいう風に言えば、叱らなくて済むのかな」と学ぶこともあります。そういう意味で、学校外の空気を入れておくと言うことはとても大切なことだと思います。

地域では子育て支援等いろんなことをやっています。私達が地域に出て行くことも大事だし、

地域がちょっと学校の力を借りたいときに、出て行くことも大切だと思います。

また、他の行政機関との連携も重要だと思います。防犯、民生委員、区役所、保健所、福祉事務所などと積極的に連携を取っていくことで、学校が学ぶことがたくさんあるし、学校だけが抱え込まないことが大事だと思います。

■林：社会的な格差が拡大し、また、保護者の意識が変化する中で、学校はどう対応していったらいいのか、についてお話しいただきました。もう一度基本的な所を見直していく必要がある。例えば、愛情とか、安心とか、安定とか、それから地域との連携などをきちんとやり直す事は重要であろうということだと思いました。

二人の方の発言をうけて、森田先生から付け加えることがあればお願いします。

問題提起3

■森田伸子：お二人の先生のお話から、今の子どもたちと学校の状況について、たくさんの具体的な示唆をいただき、ハッとしたり、新しく知ることのできたこともたくさんありました。今は時間もありませんので、3点についてだけ、簡単に私のコメントを述べさせていただきます。私は今回、子どもの世界の広げ方ということで、新しい知識教育について話しましたが、お二人の話から、それとはまた異なる（と言ってもどこかでつながっていると思いますが）観点を得ることができました。

学校という空間の開き方をめぐって

中野先生のお話から、学校空間の中にもう一つ異質な空間、例えば学級に行けないけれど、保健室とか、中野先生の所でお話しできるというような空間の意義について考えさせられました。学校の中に学級とは異なる空間、物理的なものだけでなく人間関係ということも含めて、

そういう空間があることがいかに必要か、ということを感じました。

また、加藤先生のお話からは、学校を外へ向けて開くという、中野先生のお話とはまた別の観点からの様々な取組みの重要性を学びました。例えば、学校にボランティアとしていらっしゃるシルバーの方は、学校文化と異質な存在、他者です。学校の論理では余り褒められないようなことでも、「いや、面白いね」と言ってくれるかも知れない。いわばそういう形で、学校の空間の中に外側から穴を開けていく試みだと思います。

私が提案した新しい知の教育とあわせて、学校という空間そのものの開き方というか穴の開け方として、お二人の話は大変興味深く、示唆を受けました。

スマホは新たな閉鎖的な集団を作る

二点目はスマホの問題です。かつて、マクルーハンが声の言葉の文化から活字文化に移ったとき、どう人間が変わったかという著作の最後の部分で—その当時は、電子メディアはそれほど発達していなかったのですが—「この電子メディアは、恐らく活字を通り越して、第二の対面的なコミュニケーション、新しい触覚文化を生み出すだろう」と言っています。この新しい電子メディアはいろいろな意味で、かつての身近な対面的な世界を、新しい形でもっと広い範囲にまで広げる可能性を持ったメディアだったわけです。しかし、これが野放しにされ、子ども集団の中に入っていったときには、子どもの世界を広げるよりも、むしろ、いっそう閉鎖的な集団を作る方向で働くものだと言うことを実感しました。ラインなどはもはや私にはよく分からない世界ですが、子どもの世界を考えると、次々と進化していくこの新しい電子メディアの問題は、今や抜きにすることはできない重要な問題だということを改めて考えさせられました。

誰でも参加可能な哲学教育

3点目は、加藤先生がご指摘くださった、経済的に二極化がすすんで、子どもたちの教育に大きな影響を及ぼしている件です。「朝、ちゃんとご飯食べてきた？」と聞かなくてはならないほど、保護者の状況によって養育のレベルで十分でない子どもがいる一方で、教育に投資し、結果、子どものすべての時間を習い事で埋めてしまうような家庭がある、そうした二極化が、日本中にすすんでいる状況です。そういう中で、学習の平等を確保することの必要性を先生は訴えています。

この観点から考えた時、今すすめられている哲学教育は、「正しい答えをだす」のではなく、「どう適切に問うか」という訓練です。「答えはない」「バツがない」「何点と言えない」という教育なのです。うまくすすめれば、いわゆる低学力の子どもも、文化的な環境の恵まれない子どもも、すべての子どもが、自分の素直な感性や疑問を安心して表現し、皆から受け入れられ、自分の問いが皆の探求を発展させることにもなる、という経験をすることができます。それは、普段自信を持ってない子どもが自信を持って参加できる授業になり、自己を肯定する感情を育てることにつながる可能性を秘めています。

実際に、21世紀の今、哲学教育は世界中で行われていますが、その中でオーストラリアの事例として、州政府が予算化して実験的に何年か取り組んだ例が報告されています。そこでは、いわゆる教育困難校で経済的に貧しい子どもたちの多い学校でこそ、大きな効果を挙げているということが指摘されています。

今の知識教育の中で、否応なくはじき飛ばされている子どもも含めて、どんな環境の子どもも自信を持って参加できる知識教育を導入することが、教育の機会均等を実現する一つの契機となってくれば、思いました。



■林：それでは、これまでの各シンポジストの話を踏まえまして、ご質問、ご意見ございましたら、ご遠慮なくお願いしたいと思います。

[質疑意見など]

■発言者A：測定できない新しい知識教育と測定可能な知識を前提とした近代学校教育制度とのかかわりをどのように理解したらいいのでしょうか。また、今までは情報モラルを教えるということで環境に適應するような教育をしてきた訳ですけど、子どもが健全に育つ環境を取り戻すということは具体的にどういうことなのか、もう少しお話をお伺いしたい。

学校の知識教育の見直しを

■森田：学校制度が成立した19世紀後半はコミュニケーションツールとしては活字文化の時代です。その時代に全ての国民に知を分配し、その知識の量によって選抜するというシステムが生まれたのは歴史的必然だったと思います。しかし、現在はメディアの状況が劇的に変化して、あの分厚い百科事典—私も大昔持っていました—がたった一枚のディスクに収まっている状態で、試験で採点できるような知識は全てデジタル化されていると思うんです。

ですから、19世紀に生まれた学校教育をそのまま後生大事に維持していだけでいいのか。

これだけ情報化が進んだ現代で学校だけが19世紀末にできたままのシステムと知の体系を維持して行くだけでいいのかを問いかけたいと思っています。

学校教育で、6歳から15歳、あるいは高校まで入れれば18歳まで非常に長い期間使って、断片的な知識を覚えることに費やしてしまっては本当にもったいない。覚えておく必要のある情報としての知識は、最小限に選択して、残りの時間を、たとえば地球の発生から自分達の現在の所までを丁寧に辿っていくような、結果として自分の世界観とか人間観というものに影響を与えていくような授業を構成していく。こうした迂遠な教育ができるのは、逆に言えば、学校しかない。そこにこそ学校の意義を新しく見出していくべきではないかと思えます。

しかし、一方では学校に選抜機能を求める社会的要請は当分残るでしょう。現在のメディアの状況から言うと、人材選抜の方法はいずれ変化していくでしょうが、やはり何らかの測定可能な能力というものは求められ続けるだろうと思えます。それが具体的にどのようなものになっていくかは、また別に考えなければなりません。ここで私が強調したかったのは、たとえ選抜が存在したとしても、生命を持ち、ロゴスを持った人間という不思議な存在としての自分の価値には少しも変わりがないこと、自分もまた、存在の不思議を問い続けてきた人類の歴史の中にしっかりと位置づく一人なのだ、ということ。子どもたち一人一人が生き生きと実感できるようにしてほしい、そのためにこそ、学校という場所を十分に活用した新しい知識教育を考えていきたい、ということでした。

..... スマホは使用制限すべき

■中野：環境を取り戻すには、端的には、使用制限を強化することだと考えています。2012年、13年にLINEのID検索の利用を制限し始めてい

ます。援助交際や薬物関係の入手とかに巻き込まれる温床になっているので、未成年者のIDは検索できないような制限をし始めたようですが、全然手緩いと思っています。スマートフォンは依存性が高いので、酒やタバコと同じように思っているの、未成年は使用禁止にした方がいいと思っています。ネットも子どものいる家庭には有害サイトをブロックすることを業者に義務付けるような制限が必要だと思います。

■発言者B：どんな環境においても、自信を持って自己有用感を持って生活できるということは、学校で多様な学びを保障していくことだと考えています。一律ではなく多様な学び。それが、森田先生が言われた「異なる空間」を学校が抱えていくことだと思います。

ただ、年間8千人も休職する教職員がいるような現状で、どこまで可能かということも別の問題としてあると思えます。ゆとりがないと、なかなか実践できないとも思えます。

■林：今回のテーマは、大変深く広い内容を含んでいて、今回だけで終わるものではないと考えます。形を変えて次回以降も検討していかなければならないだろうと思えます。本日話し合われた学校の役割や学校教育の根本的なありかたについて、我々が一人一人の問題として考えていくよい機会になってのではないかと思います。

これで、第27回教文研教育シンポジウムを終了いたします。



本の紹介

「明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究



リテラシー形成のメディアの教育文化史」(ひつじ書房)

府川源一郎 著 B5判函装 1200頁 19,000円

府川さんは全国教研や県教研の共同研究者として教育実践を支えていただくとともに、神奈川県教育文化研究所研究部長、研究評議会議長として、長年神奈川の教育と文化向上のためご尽力されてきました。川崎市立小学校、横浜国大鎌倉附属小学校を経て、現在横浜国立大学教授。新刊の著書は、明治期の子どもたちは、どのようにリテラシーを身につけてきたのかを考察したものです。「読本＝国語教科書」をはじめ、子どもの読み物や挿絵、少年雑誌などを「リテラシー形成のメディア」ととらえて、それらの相互関係を膨大な資料を駆使して解明した、画期的な成果になっています。今日の教科書をめぐる様々な問題を考えるためにも、また、教育と文化の問題を考えるためにも、読むごとに新しい発見のある書です。

(ひつじ書房新刊の御案内より)

